



▲81年にクイーンズ初制覇をして、日本から一緒に行った仲間に胸上げられる

バスケットからの転身

まだ誕生したばかりのプロボウリングには、他競技から転身した人が少なくなかった。杉本プロも、バスケットボールで活躍したアスリートだった。

「父親が陸上競技をやっている、今のアジア大会の前身のような大会で、ハードルでメダルを取っているんです。だから私にも陸上競技をやらせたかったみたいだけど、たまたま中学に陸上部がなくて、バスケットボール部に入った。そこから高校、そして実業団の東洋レーヨン(現・東レ)と、約12年間バスケットに打ち込みました」

東洋レーヨンは実業団の強豪ではあったが、ついに果たせなかった日本一への思いを個人競技で…と切り替える。

「当時女子のプロスポーツはゴルフかボウリングぐらい。ゴルフも考えたけど、間にクラブが入るゴルフよりも、直接素手で扱えるボウリングの方が合っている気がしました」

大阪のボウリング場の寮に住み込みで、プロを目指して猛練習に励んで11カ月、ボウリングブームの絶頂にあった72年のプロテストを受験する。

「当時の合格ラインは180アベ。センターアベが165しかなかったので、支配人をはじめセンターのスタッフには絶対に無理だって言われたけど、同じようにプロを目指して練習をしていた松葉口武博さんだけは、コントロールがいいから何とかなるよってしてくれた。当時は、後ろについてのコーチ

ングが認められていたので、松葉口さんに、宿泊費その他、経費は全部持つからとお願いしたら、自分の受験を1年先延ばしにして来てくれました。おかげで合格者14人中7番目で合格できました」

優勝すること、日本一になることを目指してプロになったとあって、デビューから数年は、チャレンジマッチその他の仕事は断って、試合と練習だけに専念した。そのかいあって、2年目の73年に3勝、74年に4勝、75年に6勝とトップ



▲「バスケットでリングを狙うのと、ボウリングでポケットを狙うのは、共通する感覚があった」と、コントロールには定評があった

気楽に臨んで全米制覇

初のアメリカ挑戦は1975年、ブランズウィックオープンへの出場だった。この年は国内の予選がなかったため、その年のランキング上位の2名、須田開代子プロ(1期・95年没)とともに派遣された。

「アンカレッジ経由でアメリカに向かっているはずが、離陸後しばらくしてスチュワーデ

スの人が須田さんにサインをもらいに来た。須田さんが『アンカレッジには何時に着きますか』と聞くと、『エッ!どちらに行かれるんですか、この便は香港行きですよ』って。私たちは受け付けて搭乗口を確認して乗ったので、調べてもらったら航空会社側のミスだってことが判明した。香港に着いてビザも持っていないから、パーサーの方について出て、ホテルを取ってもらって、日本に帰る便も、アメリカ行きの便も、ファーストクラスを用意してくれました」

余裕を持ってスケジュールを組んでいたため、試合出場への支障はなかった。

「須田さんは最後のゲームを落としてTV決勝に次点の5位、私は3位決定戦で負けて3位でしたが、ドタバタ劇を含めて、思い出に残る遠征でした」

80年にジャパンオープンを優勝し、翌年のWIBCクイーンズオープンに派遣される。

「予選8ゲームを投げて、上位72人がダブルエリミネーションに進んだのかな。あのころは4ゲームマッチのトータルピンで、私はほとんどの対戦で3ゲーム目まで負けていて、最終ゲームに逆転で勝ち上がっていききました」

ギリギリの勝負を制しながら、敗者ゾーンに回ることなく、無敗で駆け抜けた。デビューから10年目のその年、初のランキング(当時は賞金)1位に輝くとともに、全米女王の栄冠も手にした。さらにディフェンディングチャンピオンとして臨んだ翌82年は、勝者ゾーン準決勝で敗れたが、敗者ゾーンから優勝決定戦に進み、連覇を達成した。

スペシャルインタビュー

杉本 勝子 プロ (4期)

全米クイーンズ連覇 アメリカを席卷した日



杉本 勝子(すぎもと かつこ)
1945年6月25日生まれ、鳥取県出身。1972年プロ入り、4期、ライセンスNo75、通算タイトル28

今年は前半のプロトーナメントが手薄な時期を利用して、とくに男子はアメリカのトーナメントに参戦するプロが少なからずいるようだ。いいニュースが届くのを期待したいが、米本土でのタイトル獲得は(矢島純一が2016年にシニアタイトルを獲得しているが)高い壁となっている。しかしかつて、日本の女子プロが米ボウリング界を席卷した時代があった。なかでも1981、82年に全米クイーンズを連覇した杉本勝子プロに、自らのボウリング人生とともに、その当時を振り返っていただいた。

大鵬さんの気遣いに感謝

クイーンズの連覇は、米ボウリング界に衝撃を与える快挙だった。

「日本だと勝たなきゃとか、予選落ちしたら…とかいろいろなことを考えるけど、余計なことを考えずに気楽に臨めました。またそのころすでに腰を痛めていた私にとって、向こうは湿気がなくて、アプローチがよかったのも幸いでした。だけど今振り返っても、本当に私が優勝したのかなって思います。ましてや2連覇なんて、運ですよ」

しかし同じ82年に斉藤志乃ぶがUSオープンを制し、2年後の84年には稲橋和枝がクイーンズ制覇と、日本の女子プロが本場米国を凌駕する活躍を見せていたのは紛れもない事実だ。ところが

そんな偉業も、ブームが去ったボウリングに向けられる目は冷ややかだった。

「日本プロスポーツ大賞の功労賞を頂いたんですが、功労賞は各競技から一人推薦でいただける賞で、その上に殊勲賞、大賞がある。新聞社の人に、アメリカのメジャータイトルを連覇しても殊勲賞じゃないの? って話をしていたら、それを見ていた横綱の大鵬さんが『彼女は何を怒っているんだ、呼んで来い』と言ったらしくて、紹介されて、こうこうだって話をした。そうしたら食事に誘っていただいて、その席で『評価は他人がすることで、自分で言うことではないよ』って言われたけど、私は自分のことで怒っているんじゃない、ボウリングが認めてもらえないことが悔しいんですと反論した。

すると数日後、相撲部屋にマスコミの人たちを呼んで『彼女のアメリカの話の記事にしてやってくれ』と言ってくださって、実際にいくつか記事にしてもらいました。またロッテにいた落合(博満)さんからは、『キャンプに来いよ』と誘っていただいで一緒にトレーニングをさせてもらったのも、クイーンズ優勝のおかげですね」

腰痛で練習もままならなくなり、50歳手前でトーナメントからは引退した。近年はスカイAの放送席から、後輩プロたちの戦いを解説している。



▲スカイAの放送席で、前列左から朝日放送の北條瑛祐アナウンサー、杉本プロ、ゲストの姫路麗プロ、後ろは中願寺香織フリーアナウンサー

「とくに去年なんかは見ていて、女子のボウリングが変わってきたなと思いました。中島(瑞葵)さん、坂本(かや)さん、石田(万音)さんなんかは、男子プロみたいなボールを投げますものね。その彼女たちがランキングで上にいるわけだから、これからの数年で、女子のボウリングがさらに変わっていく気がします」

再び日本の女子プロが、アメリカのトーナメントで大暴れする日があることにも期待を寄せる。

「私は20年ぐらいの現役生活でした。悔いがあるといえ、あとふたつ勝って、区切りの30勝をしたかった。でも本当に人との出会いに恵まれましたし、この歳になっても解説をと声をかけていただける。幸せなボウリング人生です」